

『ゆけむり史学』第十号の刊行によせて

— お詫びとお祝い —

田村 憲美

本大学院歴史学専攻の学生が自主的に行う院生研究報告会を母体に、現役学生と修了生が相俵つて造ってきた『ゆけむり史学』もとうとう十号を数えることとなった。まことに喜ばしいことだけれども、その前にお詫びしなければならないことが二つある。

ひとつは、昨年発行された本誌第九号のことである。この号は大幅な減頁となつて、論考が一篇も掲載できず、やむなく担当の学生と教員とが相談して、修了生の方々から近況報告を募つて編集した。その原因は、十分な予算を確保できなかったためである。本来、院生の皆さんが自由に学習・研究を展開できる条件を確保する責務は教員にあるわけだが、力が至らぬ事態となり、申し訳なく思う。

編集担当を引き受けた編集担当相川健太氏（西洋史・当時前期課程二年）の活躍のお蔭で、なんとか発行まで漕ぎつけられたのは幸いだった。また、寄稿者のなかには、近況報告に寄せて歴史学専攻の現況と院生研究報告会の活動を心配し、『ゆけむり史学』の刊行のために院生研究報告会を改組し、会費制の学会としては如何かという意見を述べる修了生もおられた。会費制はともかく、教員はこれを大きな激励と捉えて、本学歴史学専攻の運営に意を用いなければならぬ。

もうひとつお詫びしなければならないのは、本号のことである。

『ゆけむり史学』誌は、本大学院歴史学専攻で勉強してきた学生が大事に育ててきた。それが十年間継続したのであるから、本来ならば、この節目である第十号を学生や修了生が記念できるように十分な予算を用意すべきであった。実情は第八号よりも若干減頁となつてしまった。

しかし、改めて喜ばしいのは、この容易ならぬ状況にあつても、編集担当学生（尾籠氏・西洋史前期課程一年）が仕事を着実に進められたこと、修了生の方々が快く近況を寄せられ、あるいは自分の研究の軌跡を示す成果の一部を惜しげなく、『ゆけむり史学』に寄稿されたことである。修了生の皆さんの現在は、必ずしも時間的・精神的な余裕に恵まれたものではないかもしれない。それにも拘わらず、このように積極的に応接されたことは、『ゆけむり史学』の活動に寄せる愛着と興望の大きさを物語るのであらう。教員としては、そのことに嬉しさと頼もしさを感じているが、今後の歴史学専攻運営の上からは、これにばかり頼つてはなるまい。

ただ、学生と修了生の皆さんは、本誌が（たとえささやかではあつても）十号を迎えたことを手放してお祝いし、誇りに感じることを許されよう。当地に立ち上る数多の「ゆけむり」と等しく、学生と修了生の活動が永く盛んならんことを希望する。

*本号に掲載された論考は長さにおいて一様ではないが、これは田村から寄稿者に呼びかけるさいに、紙幅制限について振れがあつたことによる。この点も寄稿者や編集担当学生にお詫びする。